

ロシア美術の見方：ロシア美術からロシアを知る

こんにちは、私はロシア美術担当の豊田です。ここ数年は日本でもロシアのトレチャコフ美術館展など開催されるようになり、日本でロシア絵画も少しずつ知られるようになってきました。今回は現地でロシア絵画をご覧いただく前に、少しロシア絵画についてご説明したいと思います。

○おすすめの美術館は

モスクワではトレチャコフ美術館、サンクトペテルブルクではロシア美術館の見学がおすすめです。見学はまず日本語ガイドが一通りの見どころをご案内し、その後はフリータイムでお好きな作品をゆっくりとご覧いただく時間をつくります。団体ツアーでは自分の好きな作品を見る時間がないと諦めがちですが、弊社のツアーではそういうことはございません。

○ロシア美術の特徴

ロシア美術は、その1つ1つの作品にストーリー性の強いものが多く、絵画の背景にあるストーリーを全く知らずにご覧いただくのと、知った上でご覧いただくのでは何倍もその作品への印象が違います。人物画であればその表情が何を意味しているのか、風景画であればどういったシチュエーションで描かれたのかなど、より深い理解へと導きます。弊社のツアーではロシア美術に造詣の深い日本語ガイドがストーリーの語り役となり、鑑賞のお手伝いをいたします。

○弊社のおすすめ、18～19世紀のロシア絵画

18～19世紀のロシア絵画は、画家の「日々の生活を正確に描写したい」「目に映るものをそのまま描きたい」という要求が高まり、一般民衆や地方の風景がテーマとなった数多くの作品が生まれました。それ以前の作品と比べると、親しみ深く、自然体だけれども生き生きとした人々の喜怒哀楽が直接伝わってくるような絵画が多いように思われます。

中でも、ロシア帝国に暗雲が立ち始めた19世紀後半には、現実をありのままに描くリアリズムが湧き起こりました。画家たちは「日常の生活を正確に描写する」主義を持ち、農村に暮らす人々や白樺の森、ロシア正教会といった、日常に密接した風景を数多く描きました。今回はその中でも著名な作品をご案内いたします。

このリアリズムのはしりと言われる画家が、アレクセイ・ヴェネツィアーノフ（1780～1847）です。彼は「目に写るものだけを描く」という主義を持ち、ロシアの農村の素朴さと自然と調和したその暮らしを描いた「干し草作り」や「耕作地で一春」といった作品を残しました。彼は農民とロシアの自然に着目した初めての画家でした。ヴェネツィアーノフは後

に絵画の学校を開き、農民に絵を教えました。

自然を師とする信念は教え子達から数多くの画家に伝えられ、そこからアレクセイ・サヴラーソフが生まれました。彼の代表作「ミヤマガラスがやってきた」は、越冬したミヤマガラスがロシアの大地に戻ってきた、つまり、長い冬が終わりを告げ、春の訪れがやって来たことを表し、この絵はその喜びを表現しています。サヴラーソフはロシアの風景画を確立させた人物となり、この「ミヤマガラスがやってきた」はロシア人が小さい頃から親しむ絵の一つとなっています。

ロシアの美術アカデミーは、ずっと「公的で、役人的な絵画」を推奨してきました。そこで1863年に一つの事件が起きました。この美術アカデミーの支援でヨーロッパに留学する予定だった者達が、与えられた卒業制作のテーマを拒否したのです。テーマはスカンジナビアの神話でしたが、彼らはそれを拒否し、自由なテーマで描くことを求めました。しかしその要求は認められなかったため、彼らは留学の特権も捨てて美術アカデミー退学し、新しく組合を設立しました。この初期の組合はしばらく若者から支持されておりましたが、やがて解散することになります。しかしその潮流は受け継がれ、後に「移動展覧会協会」が作られました。この協会はサンクトペテルブルク・モスクワと言った都市部から、帝国内の地方を回って絵を移動させました。この一番の目的は、普段芸術にあまり親しみのない地方の人々にそれらを知ってもらうことでした。

→より詳しい内容を知りたい方は、弊社までお問い合わせください。